

T-39

日本學生青年會同盟出版
基督教

▲
基督教の要性

英國エール大學教授ジョージ・ラッド氏講演

020507-000-6

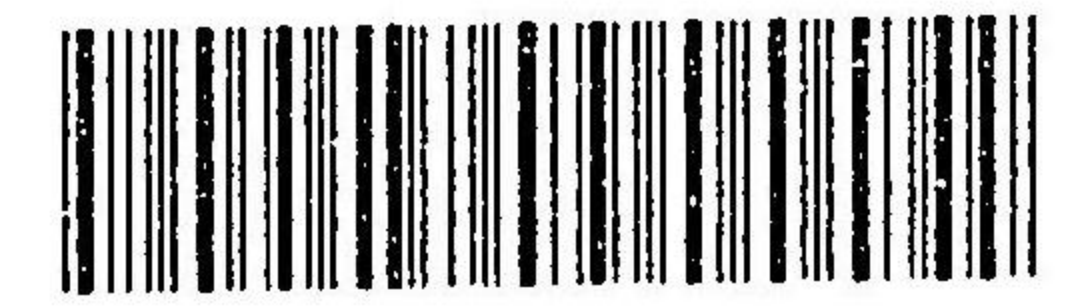
特53-305

基督教の要性

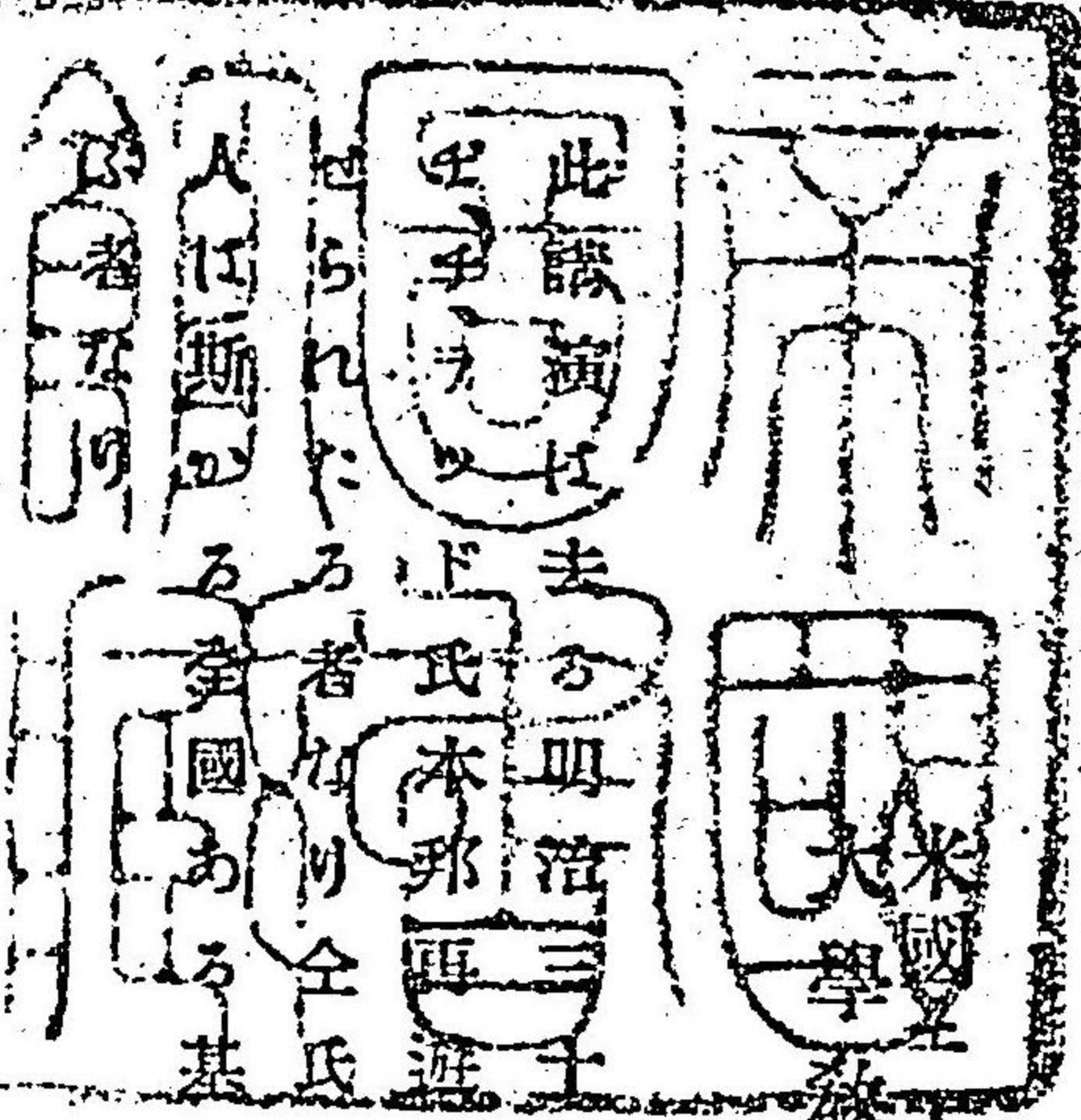
ジョージ・ラッド/述

(改訳2版, 初版34
M35)

ABI-0318



基督教の要件



授ル

シヨージ、チ、ラ



此講演は去る明治三十三年十月米國エール大學教授シヨージ、チ、ラ氏本邦再遊之砌東京基督教青年會館に於て講述せられたる者なり全氏の該博なる智識は世既に定論あり吾人は斯かる全國ある基督教的哲學者の所論を紹介するを喜ぶ者なり

古來基督教の諸種の形式を以て發顯し來たりし事は斯教研究者の證明する處にして、之を斯教信仰の形式、教會の組織、若しくは斯教の人物等に依りて視る事を得べし、時代を異にして發表したりし基督教會著名の信經、及信仰告白書

二
 等を列擧し、且之に單簡なる説明を加ふるのみにても幾多の大書冊を成すべし、況んや斯教神學説の細論を記載する書籍に至つては實に汗牛充棟も啻ならざるに於てをや、古來幾多の歸依者を有したる二三の大宗派なきにしもあらずと雖此等の大宗派も屢々平和的に小分離を爲し、或は論争的に大破裂を來し、終に斯教の名を冠せる小宗派の名稱に至りては殆んど枚擧するに遑あらざるに至れり、其他種族を異にし、性情を異にし、教育の程度を異にし、又心意的及び社會的特性を異にせる諸種異様の人物と雖、孰れも斯教開祖の名に因ちなみて基督教信者の名稱を以て呼び來られたり。然らば則ち基督教とは果して如何なる者を云ふ乎、如何なる

る信仰の形式、如何なる特性を有する教會組織、又如何なる模型の人物、若くは生活法は斯教の本体及び斯教の要性を發顯するか、こは從來絶えず斯教の歸依者によりて發せられたりしが、今日に於ても尙此疑問の必要を感ずべし、此疑問たるや、時に或は輕蔑の意を以て發せられ、或は又時に上陳の如き諸種の形式を以て斯教の發顯せられたるは、斯教の爲めに一大障礙たりしなりとの論結をなしたる者さへありき、蓋し思ふに此疑問に對する考究は、幾度か正當なる疑惑を懷きて試みられたるが如しと雖、今や斯教の先覺者に向つて發したる「基督教信者の名に耻ぢざる者とならんが爲めに正に信せざる可からざる、又感ぜざるべからざる、而

して又爲さるべからざる——畧言せば——正に實現せざるべからざる至切至要のものは何んぞやと云ふ質問に對し、明白なる解答を得んとするに當り、世人の相遇する困難よりして、端なく斯教より反背するに至りたる者の決して少數者に非らざるは疑ふ可からざるの事實なりとす。余はこれより斯教の要性に關して簡明なる解答を提供せんと欲す、而して預じめ特に諸君の注意を乞はんと欲する所は、「要性」の二語に重きを置かん事あり、余のこれより語らんとする所は蛇足的のことにあらず、又單に必要なりと云ふ事のみにもあらず。余が自ら抱持する信仰個條は一般基督教者と呼ぶるゝが爲めに必要なりと思惟せらるゝ信仰

個條よりも更に精微なる者なりとするも、而も余が認めて良しとする教會組織に他人を加はらしめんと試み、或は彼等の經驗若くは生活法をして余に倣はしめんと試みるが如らあらば是れ有害の假想たるに過ぎざるべし。思ふに基督教の要性は、自家抱持の信仰個條、自家所屬の教會、若しくは自家獨占の經驗及實行とは必ずしも精密に一致する事を望む能はざる者なり。然れども上陳の疑問に解答を與ふるに先ち、余が認めて以て全く無用の疑問なりとなすもの、及び此疑問に答ふるの困難より附起する不當の推論に諸君の注意を引かんと欲す、夫れ基督教會の諸派にして其信仰個條、其教會組織を異

にするよりして屢々激烈なる論争を醸したるは決して彼諸派の眞價を高ふする所以にあらず。要するに彼等は肝要の點に於て相一致し、且つ相互ひに和親せざるべからざるものなるに、反つて肝要ならざるの點に於て一致する能はざるよりして、互に相傷け、相誹りて未だ斯教に入らざるものを混迷せしめたるは、たましく、彼等品性の不完全なるを公表するに過ぎず、然りと雖も、斯教が其不變不朽の要性を上陳の如き諸種の知的、情的、組織的又實際的形式を以て發顯するに至りたるは決して斯教の眞價を毀殞する所以にあらず、凡そ宗教にして其信仰の告白に諸種の形式を採るを容さず、又發達の餘地をも存せざるものは、駭々として止

まざる人知の要求に満足を與ふる能はざるべし。又凡そ一宗教にして萬人萬世を通じて適用せざるべからざる唯一無二なる信經の外何物をも有せざるものは、他教に優りて普及的資格を多く有する者と認めらるる事能はず。彼の政治的組織は人間社會要求の變遷に隨つて變遷せざるべからざるが如く、宗教的組織も亦然らざるべからざる者ありて存す。所謂單一性の宗教、即ち良く知能の要求を満足するも、情性を満足せざるもの、情性の要求を満足するも心意を満足せざるもの、又思辨的、神秘的なるも實際的生活の基礎となり、指針とならざるものは、萬人に適合するの宗教にあらず。此故に基督教の常に發顯したる諸種の形式は斯教の

真理なることを排し、若しくは人類的宗教なることを排するの論據とならず、反つて此の如く諸種の發顯をなすの力を有するは適々斯教が大に他教に優れる所ある事を証明するものと云ふべし。

基督教の要性を研究せんとするに當り、之れを其消極的方面より始むるも亦一方なり、然らば則ち如何なるものが――縦し貴重にして有用なるにもせよ――絶對的必要物にあらざるやを簡單に説明せんに、先づ信仰個條の細目は其何んたるを問はず、斯教にとつて必要欠くべからざる者にあらず、彼の所謂使徒信經なるものは、諸種の信仰告白中、最も最廣く、且最多くの人々によりて信受せらるゝものなり。

と雖此最古く且つ貴ぶべき信仰の告白すらも、其中の或言句、或語法中には純然たる斯教の要性を遺憾なく發表せりと云ふべからざるものあり、使徒信經にして尙然り、況んやこれよりも更に後に出で、これよりも更に詳密ある信仰個條を立つる者に於てをや、人或は此等の信經を承くるに躊躇し、若しくは全然拒絶する者もあらんと雖も、斯教の要性に關する確信に至りては尙之れを確持する事を得べし。教會組織の如何は、斯教の要性として數ふべきものにあらず、凡そ一社會あれば必ず或る形式を有するに至るは人類の社會的宗教的本能より發する自然必至の結果なりとす、而して斯教の開祖が一種の形式を取れる社會的宗教的團

十
 体を建設せんとしたるは明白なりと雖、此同一開祖に誠忠
 を表する諸使徒中にて或る使徒を他の使徒よりも一層高
 くせんとするが如きは使徒の眞精神と合するものにあら
 ざるや明けし。且又或る基督信者によりて享有せらるゝ貴
 重なる特權及び利便は、其所屬の宗教團體と密接なる關係
 あるや疑なしと雖も、此宗教團體を組織し、且つ此を統治す
 る特種の形式を以てのみ基督の唯一無二なる眞教會あり
 と主張し、若くは之れに屬する信徒のみを以て基督教的生
 活の要質を占得するの價値あるものなりと誇稱し能はざ
 るや明かなり、否な、余は或信者間に存する敵意と分離を見
 るに當り、又上陳の主張によりて釀造せられたる盲従と懷

疑を見るに當り、斯る主張をなす者の如く大なる疑惑と害
 毒を世に流布する異端はあらじと云ふの止むを得ざるを
 感ずるあり。何人の宗教的經驗の特質たりと雖も、之れを以
 て基督教の要性と混同視すべからず、改心者となる時の一
 種の模様、宗教的感動を催ふす時機の順序、及び禮拜に關す
 る一定の日課等は、一として基督教的眞生活の必須條件と
 云ふべからざる者なり。
 信經は信者の精思熟慮を表示するに必要なる告白なり、教
 會は信者眞情の鼓動より生ずる當然必至の結果あり、又經
 験と生活は斯教最後の検査所なり、凡そ此等の者は擧げて
 斯教の本性に備はれり、此等のものは皆神爲によりて各々

基督教の要性

當然の權威を賦與せらるゝと雖も如何に精しき信經も、如何なる教會組織も、如何なる經驗又生活の方法も之を以て斯教の要性なりと云ふ可らざるなり。

然らば則ち積極的に言ひ現はさるべき基督教の要性果して如何余は前に約したるが如く、簡單明白なる言語を以て此疑問に及ぶ限りの確答を與ふるに力むべし、然れども余は亦戰々競々として慎重以て此事を成さんと欲す、蓋し此事たる容易の業にあらざればなり、而して所思らく余の答ふる所必ずや或人には簡單に失して意を盡さざるの憾みあるに、他の人には余の言説する所すらも既に贅辨に失すと思惟せらるゝが如き事あらんと。

基督教の要性

基督教は他の宗教と同じく人間の全心全体に其勢力を及ぼすものなり、故に基督教は知的確認の一形式なり、感情の一形状なり、又實行規矩の一方法なり。

先づ第一、如何にして斯教信仰の要素なる知的確認を簡明なる言語を以て説明すべきや、余は此疑問に對して斯教肝要の教理若くは信仰は左の如しと云はんと欲す、曰く、「神人類の父となり、又贖主となりて彼等と偕に在ます」と、此一句は簡單なりと雖も三個の貴重なる真理を含蓄する者にして此三個は畢竟一個の大真理を組成する三分子に外ならざるなり、三個とは何んぞや、他なし、第一、神の人類に近く在まし給ふ事、即ち神人合体の事、第二、神は人類の父にして此

神人間には親子的關係の存立し得べき事、第三、人類は贖罪を要求する事、及び神は常に人類の父なるのみならず、又其贖主なりとの福音を要求する事これなり。

基督教の有神觀は單に神を思辨的に表現して満足する者に非ず、換言すれば神を以て一種不可思議の勢力なりとし、若くは最上無二の實體なりとし、若くは至大至廣の不可識者なりとして満足する者に非ざるなり、基督教の有神觀は「イマニユエル」なり——神人と共に在まして其父となり、贖主となり玉ふとの義なり、かくて斯教は神よく人事に關し玉ふとの確信を形成し、併せて神は倫理的の靈物として人を啓發照覽し殊に一個の人物を通じて自己を人類の救主

として顯現し玉へりとの確信を形成する者なり、神人と偕なりと云ふ、此廣大にして慰籍ある真理の微光は、他の大宗教に従ふ師父、預言者等によりても認められ、又彼等は人となりて世を救ひ、世を清むる底の神を得ん事を求めて微かに之れを認めたりき、然りと雖も他の宗教は一として此大切なる真理を基督教の如く明白適切にして且善を爲すに有効ならしめしとなく、又神に關する觀念を神は倫理的の靈なり、自己を人類に顯現し、且親く人類の衷にやどり玉ふ者なりと云ふが如く、高尚なる位置に迄達せしめし事なし、神の父なる事を教へ、人類の神に對する關係は子の父に對する關係と幾分か相類似する者ありとば、神人二者に關し

て凡て他宗教の説きたる教理の重要點たるなりと雖も此眞理——神は人類の父ありて眞理は聖書の啓示によりて他宗教の經典に嘗て見たる事なき明白有力の者となされたり。而して基督の教訓及び基督の基督教は此眞理を他宗教が嘗て試みざりし程に強く主張し、説明し、且實際に應用するあり、神は父にして、人類は其子なり、神の存在の秘義は限りある人智を以て今も後も永久にも識り得可からずとするも、此眞理は永久不動なり、此關係は最も高尚潔白なる意味に於ける人類社會的關係の根底なり、此關係の切要なる事に就ては舊に言語上より推論を爲のみならずして實驗上より言ふ事を得べし。夫れ神は人の贖主、罪の罰と其

力より贖ふとして人と偕に在ますと云ふ、此確信は基督教要理の中心點なる事は古今を通じて變せざる處なり。而して此教理たるや單に思辨的、若くは理論的の事柄にあらずして寧ろ實驗的、即ち贖罪の經驗に基ける眞理たるなり、如何となれば此眞理を純粹無垢のまゝ深く心底に藏する信徒に在りては、救は遠き未來世界の事にあらず、救は現在のものにして個人並に人類社會の發達に伴ふ進歩的の者たるなり。

神は人類の贖主として人類と偕に在ますと云ふ眞理は無論其側面を有す、何ぞや、曰く「人は神の贖を要求す」との眞理これなり。此の眞理たるや實に前の眞理を証明する所以の

者にして又これを存立せしむる所以の根底たるなり、又此眞理は單に思辨的若くは理論的にあらずして實驗的の眞理あり、即ち個人及び人類の有する悲むべき經驗的事實的の眞理たるなり、如何にして此眞理が實在せざるべからざるに到りしやに就ては種々の論說あるべし、而て吾人は一切の合理的質問に對して満足なる解答をなし能はずとするもこれが爲めに基督教の眞理は少しも變動せざるなり。英の碩學コレリッヂ云へる言あり「人の自己に對して發し得る最大必要の疑問は（余は贖主を有するや）と云ふにあり」と、然りと雖も先づ「余は贖主を要するや」と云ふ疑問に解答を與へざる限りは此の疑問は不可答的無用の空言と化し去ら

るべし、基督教は此の二問の孰れに對しても「然り」の一言を以て答ふる者なり、諸君も余も又凡ての人も其如何に高貴の身分なると、其如何に天成の才能あると、又其如何に學問の廣博なるとに論さく、悉く是れ贖罪の必要を有するものにして神の佑助を得ずして人類は「救の道」を歩む事能はず、而して此神の佑助や甚邇し、そは神は人類の贖主として此世に來り玉ひしのみならず、今も尙世にあり、又永遠世にあり玉ふべければなり。基督教者は一見種々なる宗理を信せざるべからざるが如しと雖も余は思へらく、基督教の要性は實に「神、人類の父として又贖主として人類と偕に在ます」と云ふ一句の中に含蓄

せらるゝ。

然りと雖も宗教は決して全然知的確認則ち知力の事のみにあらずして又常に情の状態、則ち感情の事も有するものあり、即ち基督教の要性中に人の感情に勢力を及ぼす底のものある事を忘るべからず。正當に解釋せられたる基督教の信仰は眞理と認めらるゝ、或者を保持するの形狀に非ず、又此保持せらるゝ眞理が相當の熱情を以て温められしものにもあらず、斯教の信仰は寧ろ情の或常住的性質をとれるものなり、即ち吾人が吾人の父なる贖主なる神に向ひ、又神の子なる同胞人類に向ひて發する情の有意的態度たるなり。然らば問はん、眞正なる基督教者の信仰に大切なる

感情とは、果して何んぞや、余は此疑問に對して左の如く答ふるを當然なりと思惟す、曰く「基督教を主として眞情の一態度ありてふ點より觀察する時は、斯教は神に對する愛的信任と、忠順の精神に外ならず」と。

既に言へるが如く基督教の信仰とは或形式を具する眞理に寄する一片の信認に非ずして愛の満てる信認、則ち情の一態度たるなり、而して基督教者は神人類の父となり、又贖主とありて人類と共に在ますてふ事を信するが故に彼は熱情を以て上陳の意味に於て神に信賴する者なり、新約聖書は凡そ基督教者として有せざる可らざる信仰の要性を明ならしめんが爲めに「信する若しくは信仰する」てふ働詞

基督の要性

に三つの前置詞を附隨せしむ。三つの前置詞とは「トワード」(向て)「アッポン」(於て)「イン」(中に)これあり、則ち基督信徒は靈の贖主たる神に向ひ又神に於て、又神の中に信仰を有せざるべからざるなり、此三つの前置詞は神の其眞子に望み玉ふ愛的確信の性質を示すべき三個の譬喩にして此等の譬喩を以て説明せらるゝ經驗は取も直さず吾人が愛的信任を活動せざるべからざる凡ての場合に於て實驗するものに外ならず、吾人は斯る信任を或人に置んとするに當りて此心情は其人に向つて「逕出し、其人に於て「安息し又其人の「申に「慰籍と希望とを發見するを覺ゆべし」わが全靈は汝に向つてを「ぎ出づるなり」とは余が信愛する友に對して感

基督の要性

ずる所なり。吾人は泰然として自然力の上に此生命を托するを得べしと雖而かも人に對するが如き愛情を以てこれに接する能はず、然りと雖も吾人の信愛する朋友には愛もて高くせられ温くせられたる一の確信を以て倚りすがり得るなり、夫れ基督教に必須なる信仰は靈の父又贖主たる神に向ひ、又神に於て、又神の中に傾注する愛的信任の態度たるなり。

神に向ひ、又神に於て又神の中に愛的信任を有せん事は吾人の容易になし得べき事にあらず、亦自然になし得べき事にもあらず、基督教以外の宗教を信じて此確信を得、而してこれより生ずる品格の變化、世界觀及び人生觀の變化を實

驗したるもの甚少なし。反て彼の他教徒の大群は上來の神
 に對する愛的信任てふ事には無縁の異邦人たるなり。彼等
 の主として渴仰禮拜する諸神は有害有毒の勢力たり。彼等
 は其信仰を深くするに隨て、其生活ますます暗黒と罪惡に
 充つる者となる。雖も愛的信任の態度は常に基督教の一
 大要素たり。而して信者たる者の衷情に未だ此萌芽の植付
 けられざる間は、基督教者たる眞生命は尙未だ初まらざる
 ものと云ふべし。

こゝに蘇國の大説教家、ドクトル、チャーマーズの語りし一
 美談あり。彼れ嘗て「信仰を有すとは如何なる事か」との意を
 解せずして中心大なる昏迷苦痛を感じ、之れが爲に將に死

に瀕せんとせる一貧女を訪問せん事を乞はれたる事あり。
 さて蘇國には「リップン、ツ」てふ語あり、「密着す」との義にし
 て例へば岩筈の岩に密着し、樹苔の樹に密着するが如し。彼
 れ婦人に謂つて曰く「わが愛する婦人よ主耶穌に密着せよ」
 と、即ち岩苔の岩に密着するが如く、樹苔の樹に密着するが
 如く、汝の心をして汝の主又汝の贖主に密着せしめよとの
 謂なり。是れ即ち基督教信者が正に有せざるべからざる衷情
 の態度を示す教訓ありとす。

忠順の精神も亦基督教的生活の大切なる情なり。忠順の徳
 よりも更に高尚にして嘆美すべきものはあらず。是舊日本
 に發達を極めし儒教道德の本源にして又其中心點なりとす。

然るに之れを推重し過ぎたるの結果或一種の極端的背理的の現象を發生せしむるに到りしと雖も亦最も高尚なる人物を排出せしめて且つ多數のものを最も歎賞すべき事業に感奮興起せしめたり而して事實上朋友間又人類間に於て眞に忠實てふ事よりも優りて歎美すべき者いづくにかある朋友間に於て彼が不忠實なるを確めたりてふ事よりも優りて吾人を失望落膽せしむるもの何くにかある。歴史上アブラハムを眞に高貴なる大宗教家なりとして世に紹介するに「信仰の父」及び「神の友」てふ二つの尊稱を以てせりと雖も凡そ信者たらんものには神に忠實なり神の友なりてふ稱號は適用せらるべき者なり、基督信者の信仰は彼

をして忠信ならしめ、基督信者の友情は彼をして忠順の精神に身を固めしむ、此忠と順とは常に相伴ふ者にして忠は寧ろ順の中に其本体を現はすなり、如何となれば我が友なる基督は亦我が神我が主なればなり。然りと雖も吾人は更に尙ほ一個の疑問を發せざるべからず、曰く「吾人の生活法に對して基督教が爲す點より見たる斯教の要性如何」と、蓋し眞の基督信者に或種の生活法の必要なるは論なき所なればなり。云々の飲食をなし、云々の衣服を着、云々に日用の些事を處理し、云々の節慾を實行し、云々に外形的の行爲をなし、云々の職務職業をなすべしと云ふが如きは實際的基督教の要性中に數ふべき者にはあら

基督教の要性

す、淋しき貧賤界に處する時にも、豊かある多忙界に處する時にも、如何なる境遇に居り、如何なる職業を營む時にも、基督教者は其當さに然るべき生活法を實行し得るなり。故に一定の生活法なきが如きも而かも尙斯教必須の生活法あつて存す、其生活法とは何んど、此疑問や、信者日常の細行を律する一定の規則を指示するが如くに解答すべからず、然れどもこゝに珍らしき一書あり、數世紀以前嘆美すべき精神の一羅馬教徒によりて著述せられたり、其書名や直ちに此疑問に對して正解を暗示すべし即ち余はトマス、アケンピスの「基督模倣論」を意味するなり、而して此の高貴明瞭なる「基督模倣」てふ一句すらも、吾人は之れを奴隸的に解

基督教の要性

する事をせざるなり、基督教の要性は、其開祖の行爲を細目までも模倣するの邊に存せず、只其品格と行狀に於て基督の如くなり、基督の實例に則れる生活を實地に行ふの點に於て存す、是れぞ確に吾人の探究に對する正解なり、各人生活法の細目に入りては、互に其性情、教育、境遇及び機會を異にするが如く互に相異なるべき者なり、然らば則ち此の特別的の疑問には、各信徒銘々自己に適する底の特別的解答を案出せざるべからず、然れども困難なる境遇に接觸し、疑はしき場合に逢着する毎に「基督の精神を現はす爲めに吾人は如何に行動すべきや」との疑問を自問せざるべからざらん、若しくは一層實地的の答を與ふるに便せん爲めに、換言

せば——余が得て以てこれを實地に現はさんと欲する完全無欠の精神を具へ玉ふ基督が今此處に余と同一境遇に立ち玉ひしならば如何に行動し玉ふべきや」どの疑問を發せざるべからざらん。

終りに臨み、吾人をして上來陳べ來りたる諸思想を總括的に一言する處わらしめよ、基督教の要性とは如何、更に之れを具体的に換言せば、基督信者の名に耻ぢざらんとするには如何なる事を爲さざる可らざるや、吾人は之に對して左の如く言ふを得ん、曰く己の父とし贖主として神を信じ、神に向つて愛的信任と忠順の精神とを懷き又神の子、耶穌基督の實例に従はんとして力を盡すものは基督信者なり、此信

仰、此愛情の態度、此生活法は基督教の要性を組成する所以のものにして、凡そ此等のものを有する人は救の眞道に入りたる人なり、而してこれ以外の信仰、經驗、若くは教會の關係を必須なりと思ふ者あらんも、此要性をだに有するものは、平和に又愉快に完全圓滿に達するの道を進歩し得るなり、是れ吾人が凡ての人に向つて推薦する眞宗教にして又吾人が全人類の渴仰を支配するに到らん事を希望する眞宗教たる所以なり。

明治三十四年二月九日印刷
明治三十四年二月十二日發行
明治三十五年三月十二日再版

(定價金四錢)

編輯人兼
發行人

東京府豊多摩郡澁谷村
字青山北町七丁目壹番地

高井直貞

印刷者

橫濱市太田町五丁目八十七番地

村岡平吉

印刷所

橫濱市山下町八十一番地
福音印刷合資會社

發行所

東京市神田區美土代町三丁目三番地
日本學生
基督教青年會同盟

日本學生 基督教 青年會同盟出版書目

- 一 日本學生 基督教 青年會同盟憲法 一部(郵稅共)金 三 錢
- 一 學生基督教青年會準則 一枚(郵稅十枚)無 料
- 一 學生基督教青年會同盟祈禱日課 一部(郵稅十部)金 三 錢
(マデ二錢)英文金五錢
- 一 學生基督教青年會同盟歷史及事業 一部(郵稅十部)金 三 錢
シヨン、アール、モット氏著
- 一 靈性進歩ノ爲聖書研究 一部(郵稅十部)金 三 錢
シヨン、アール、モット氏著
- 一 秘密ナル祈禱ノ生涯 一部(郵稅十部)金 三 錢
シヨン、アール、モット氏著

一 曉の祈念

一 聖書研究綱目パウロ傳

一 基督傳研究綱目

一 基督信徒の特徴

一 基督教の要性

日本學生 基督教

青年會同盟

學生同盟機關雜誌隔月一回發兌
 一年前金廿五錢郵券代用不苦

シヨン、アール、モット氏著

一部(郵稅五部)和文金三錢
(マデ二錢)英文金十錢

シ、エム、フ井シヤ一氏著

一部(郵稅五部)金 三 錢
(マデ二錢)

シ、エム、フ井シヤ一氏著

一部(郵稅一部)金 十二 錢
(二錢)

内村鑑三氏著

一部(郵稅五部)金 三 錢
(マデ二錢)

シヨイチ、チ、ラツド氏講演

一部(郵稅五部)和文金四錢
(マデ二錢)英文金六錢

學生好讀書料

1 The Fact of Christ by Carnegie Simpson.

右は平易なる英語を以て書かれたる基督傳なり

一部 定價 二十錢
郵稅 四錢

1 Christians of Reality by John R. Mott.

右はモット氏の英語演說六回を集めたる者なり

一部 定價 四十五錢
郵稅 六錢

一 青年の誘惑 (石川林四郎氏通譯)

一部 定價 二十錢
郵稅 二錢

一 個人傳道 (北原義雄氏譯)

一部 定價 四錢
郵稅 五部迄三錢

一 ゴルドン將軍傳 (徳富健次郎氏著) 一部 定價 共五十錢
郵稅 共五十錢

一 リビングストン傳 (有本武郎氏共著) 一部 定價 卅二錢
郵稅 六錢

右書籍は特に學生の爲めに出版せられたる者なれば金員請取次第喜んで郵送の勞を取るべし

日本學生 基督教 青年會 同盟事務委員

中央委員長

ドクトル、オプ
フ井ロソフ井

元田 作之進

同 副委員長

本 多 庸一

會 計

ドクトル、オプ
デゲニチー

チエ、エル、デーリング

記 録 書 記

理 學 士 宇 野 太 郎

同盟名譽幹事

ジ、エム、フ井シヤール

同 幹事

文 學 士 高 井 直 貞

T-39